

随 想

あ〜っ！あ・・・

新 7 米田 綾子
2016 年 12 月寄稿

平成 28 年 11 月 18 日(金)

我が家は朝からソワソワしていました。その数日前に回覧板で詳細が回ってきたからです。

それは・・・、天皇、皇后両陛下の地元小牧メナード美術館へのご来館です。いつ頃どこを通る〜という情報のもと、当日歩いて娘と向かいました。

到着するとすでにどこも二重三重の列、もう仕方ないのでこの辺りならという位置で待機です。どのくらい待ったでしょうか・・・、ものものしい白バイ・パトカー先頭で窓全開の黒塗りのお車がアッという間に通り過ぎました。

お顔は残念ながら拝見出来ませんでしたが、皇后さまのグレーのスーツとお振りになられた手を少しだけ見せていただくことが出来ました。

一生のうち両陛下にお会い出来ることが一度もない人生も多々あると思われる中、今回は我が家の近くにいらっしゃるといふ奇跡に感謝でした。貴重な体験をさせていただきました。

(娘さんより一言・・・、平凡になった母の日常には大きな出来事でした、待ったのは 2 時間位だったかと・・・、本の数分でそのお車は行ってしまいました、立ちっぱなしを心配しましたが、周りの方と話したり、ものものしい警備を眺めていたら過ぎていきました。)



完走完歩函館マラソン

新 22 向 支部長
2016 年 11 月寄稿

函館の上空を何回も旋回した後、滑走路に向い急降下、すぐに機首が持ち上がり、「千歳に向います」との機長のアナウンス。

7月1日、この日函館空港付近は深い霧に包まれて何も見えない状況だった。

蒸し暑い千歳に着いて空港職員から 8,100 円のJR切符を受け取り、函館行きの特急に乗車。(想定外の展開にも、誰も何も言わず粛々と行動する！凄い)

すでに列車は満席状態で、全員通路やデッキで立ちつくし乗車率 150%。

列車の旅で、昼食の「寿司か函館塩ラーメン」の夢が消えたが、湖のように穏やかにキラキラ光る噴火湾、反対から見る駒ヶ岳・函館も新鮮で得をした気分になった。

この日、函館のホテルは空きがなく、普段はあまり使われていないという看板もない所に宿泊。

稼ぎ時なので通常より高い一泊 2,500 円とか。昼部屋に布団敷き詰められ雑魚寝の状態だが、「お風呂はパコ、松風町電停まで5分位、窓の外は大森浜」と湯川のホテルにも負けない良い場所だった。

四時前から夜が明け、海辺には何人かの釣り人がいた。走る準備も完了し、身動きがとれない位満員の市電で、スタート地点の千代台陸上競技場へ。

9時ハーフ、少し遅れてフルがスタート。本当は西部地区を走るフルマラソンに参加をしたいが、制限時間5時間という高すぎる壁があり、今年もハーフに参加。

10キロまでは順調に走り残りをフラフ

ラで予定の3時間で完走(完歩)。前回は競技場手前で時間切れだったので、素直に嬉しい。

子供のように、完走証とフィニッシャータオルが欲しかったので満足。

マラソン大会の参加賞はTシャツが定番で家中に溢れているが、今回は函館、お金を出してもほしくて、テーオー小笠原で作ったものを3,000円で購入。(図案は函館山から見た街並み)、さらに嬉しかったのは、ゴールには48年ぶりに会う函館商業の同窓生が待ってくれたことだった。

事前に配られた名簿で、走るのの確認していたが、折り返し地点後豊川町？ですれ違いざまに、名前を叫ばれビックリ。コース上でのお互い卒業以来の再開なのに、8千人の中から見つけることができるとは若いころと変わっていない証拠！！

夜はもう一人来てくれて五稜郭で完走祝賀会、在学当時はサッカー、ハンドボール部で学力も優秀な二人。学校祭など昔の記憶が次々蘇ってくるが、タバコを吸った、酒を飲んだなど悪いこともしていたという話になると、自分はやっていないので一人浮いてくる。

高校時代は、クラスでは存在感がなく、バレーに全身全霊を傾ける生活を送っていた。「授業中は寝ないで先生の話は聞け、そうすれば赤点は消してやる」という顧問の和田先生の教えを信じて勉強もせず、今のマラソンのような下から数えて何番目という順位を彷徨っていた。

今回の二人とは違い？「真面目だが、だらしなく、できの悪い生徒」だった青春時代を再認識。二人のお陰で戻っても行き場所のない函館で楽しい時間を過ごさせてもらった。

翌日は、そのまま空港に直行。函館山・八幡坂などの観光も一切なく、松風町のコンビニとドラッグストア・満員の市電、整理券を貰って入ったホテルの温泉など、最後まで寿司には縁がなく、寿司詰めを散々味わった函館マラソンだった。



沿道からいっぱい貰った「とおさん！(父さん)、がんばって！」という声援がしみた。血につながる故郷を無くしても、心につながる故郷・言葉につながる故郷を感じ、身勝手と思いながらも函館はあまり変わってほしくない。

少しでも故郷に貢献できるよう、名古屋でも細々ながら母校の火を灯していきたい。(2017.夏)

